

JA実践事例紹介

全世代型食農教育の 実践と展望(後編)

JAあいち中央
品目横断のブランディングをきっかけに
全世代に広がる食農教育

小川理恵

一般社団法人日本協同組合連携機構 基礎研究部長・主席研究員

「全世代型食農教育」は、「第30回JA全国大会決議」における「くらし・地域活性化戦略」の中で「協同活動における最も重要な取り組み」として掲げられた。令和7年6月には農林水産省が「官民連携食育プラットフォーム」を立ち上げ、「大人の食育」推進に取り組んでいる。子ども対象に留まらない食農教育の実践は、国民理解の醸成、また多様な層との接点づくりに向け、JAグループ内外から求められている。その展望を2JAの事例から探った。

後編では、JA・管内農産物への理解と愛着を醸成する「碧海そだち」プロジェクトや、「親子農業体験スクール“あおみっ子”」における小学生とその保護者、そして卒業生である中学・高校・大学生をも巻き込んだ食農教育の実践をはじめ、全世代に広がるJAあいち中央の取り組みを紹介する。



地元産の農産物と、その魅力を高める活動、そしてそれらのファンとなる地域の人々、すべてを包括するシンボルである「碧海そだち」

■ 1. 農産物全体の魅力アップを目指して

J Aあいち中央は、その名が示すように、愛知県のほぼ中央に位置している。碧南市・刈谷市・安城市・高浜市・知立市と5市にまたがる広大な優良農地では、お米、ニンジン・タマネギをはじめとする野菜や、梨やイチジクなどの果物、カーネーションや菊といった花卉類など、多彩な農産物が産出され、かつては「日本デンマーク」とも呼ばれた農業先進地域である（J Aあいち中央HP参照 <https://www.jaac.or.jp>）。

その名にふさわしく、同JAでは農産物ごとに工夫を凝らして、集荷・販売を行ってきた。しかしその一方で、多様化する品目を横断する販売の取り組みが少ないという課題もあった。経済部門の収支改善が求められるなか、成長戦略の1つとして、農産物全体のブランド化の必要性が高まり、令和2年9月に「農産物ブランド化プロジェクト」が立ち上げられた。

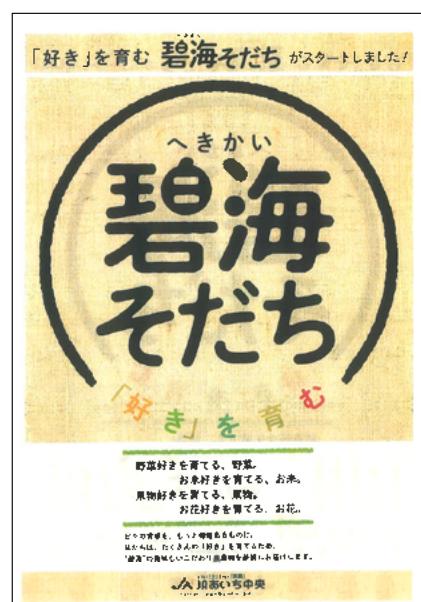
そのなかで重要視されたのが、農産物全体として、まずは“良いイメージを持つてもらうこと”である。そこで、ブランディングは特定の品目ではなく、JAあいち中央の農産物全体のイメージを高める、という方向性があらためて確認された。そして、管内（碧海地域）で収穫され、JAを通じて販売されるすべての農産物の総称として、地域名を冠して「碧海そだち」という名称が用いられることとなった。

■ 2. 農産物・活動・人々のシンボル「碧海そだち」

「碧海そだち」という名称が地域全体に浸透するまでには時間を要する。そこで、農産物そのものだけでなく、農産物の価値を高める推進活動も「碧海そだち」に含めることとした。加えて、この名称には碧海の農産物を「食べることが好き」な人や、碧海で農産物を「育てることが好き」な人を育てたい、という「好きを育てる」という意味も込められた。つまり、「碧海そだち」とは、地元産の農産物と、その魅力を高める活動、そしてそれらのファンとなる地域の人々、すべてを包括するシンボル（象徴）として掲げられたのである。

こうして「碧海そだち～好きを育む～」（以下、碧海そだち）は、「『碧海そだち』がある毎日」をキャッチコピーに、JA全体の活動として令和3年6月に本格始動した。

碧海そだちで取り組むのは、①食の提案、②



「碧海そだち」のシンボルマークがあしらわれたチラシ

交流の提案、③食農教育の提案、④購入の提案、⑤体験の提案、の5つの分野と定めた。そして総合企画部企画課が事務局（現在は営農企画部営農企画課に変更）となって全体の進捗管理や広報活動を行いながら、各部署が分担して具体的な活動を推進する形を整えた。月に1度は関係部署による「碧海そだち推進会議」を開催し、進捗報告や新たな提案など、全体の方向性が行き違うことのないよう、関連するすべての事項を同会議にて協議することとした。それは開始から4年半余りが経過した現在も継続されている。

■ 3. JAや農業のファンづくりに直結する「碧海そだち」

次に、碧海そだちの特徴的な取り組みをいくつか紹介しよう。

(1) 特別企画「碧海そだち オブザイヤー2021」

碧海そだちがスタートした令和3年には、特別企画として、「碧海そだち オブザイヤー2021」を開催した。これは、同年に実施した「第1回准組合員訪問活動」と、後述する安城市図書情報館での特別展示において、「〇〇好きになったエピソード」を募集し、表彰するというもので、管内から全部で229通ものエピソードが集まった。「野菜好き」「お米好き」「果物好き」「お花好き」に分類したうえで、JAの全役職員が「よい」と思うものに投票し、「碧海そだち賞」「JAあいち中央賞」など、6つの賞を選出した。投票結果は、JA情報誌の「ACT」誌面で、写真入りで紹介した。

投票に参加したこと、役職員は、組合員や利用者がJAのことをどのように見ているのかを知る、よい機会になったという。



情報誌「ACT」に掲載された受賞エピソード。
世代を超えた管内農産物への愛着が感じられる
(画像をクリックすると拡大表示されます)

(2) 安城市図書情報館での特別展示

営農企画部と産直振興部、そして安城市的市民生活部がコラボして進めているのが、安城市の図書情報館における農産物に関連した書籍の特別展示だ。毎年8月下旬から2ヶ月にわたって開催しており、恒例行事として定着している。令和4年の特別展示では、「『碧海そだち』実りの秋」をテーマに、旬を迎えたイチジ



農産物と図書の立体的な展示、また食育ソムリエらが考案したレシピの配布など、豊かなコンテンツが目を惹く

クや梨など特産の果物を、実物だけでなく目を惹くパネルや色とりどりのレプリカを利活用して分かりやすくディスプレイした。同時に、安城市図書サービス係の職員や司書の協力のもと、様々な果物に関連した書籍もたくさん並べられた。さらに、子どもたちに馴染み深い絵本に出てくる料理を食育ソムリエが再現したレシピや、地元出身の料理研究家による「苦手野菜克服レシピ」も紹介し、人気を博した。

特別展示は、普段は本を借りたり情報を調べたりする図書館を会場としていることで、通常の買い物などでは気づくことのない“地元の旬”に、思いを馳せるきっかけになっている。

(3) オリジナル食農教育絵本の無料配布

J Aあいち中央では、オリジナルの食農教育絵本(令和8年1月現在 計4巻)を作成し、管内の年長園児約5,000人へ毎年配布している。この絵本は、管内でとれる農作物をモチーフとした8人の「あおみっ子ファミリー」が主人公で、彼らが様々なハプニングに遭遇しながら、農業が大切な「宝物」であることに気付いていく冒険ストーリーが展開される。食べ物の大切さを伝えるとともに、地元の農産物を好きになってもらいたい、というJ Aの思いが込められた温かな絵本だ。制作には、広報担当者を中心に、若手職員も参加する。絵本の配布は、平成27年から取り組まれており、現在は碧海そだちの一環として実施されている。これまでに合計で約5万5,000冊以上が地域の子どもたちの手に渡っているという。



令和7年の贈呈式では、「あおみっ子ファミリー」が園児に絵本をプレゼント。その後、一緒にダンスを踊って楽しんだ

碧海そだちは、立ち上げから今年度で5年目となるが、これらの取り組みを筆頭に多面的に展開しており、年々認知度が高まっている。

毎年開催されるJ Aまつりでは、親子を対象に食農クイズとともにアンケートをとっている。「碧海そだちを知っていますか?」という質問に対し、「知っている」「聞いたことがある」「知らない」の3択で聞いたところ、「知っている」「聞いたことがある」の合計は、取り組み2年目には80%だったものが、今年度は、88%にまで向上した。「知っている」を見ても、同50%から60%と、10ポイントもアップしている。

■ 4. 子どもから保護者へと広がる 「親子農業体験スクール“あおみっ子”」

碧海そだちは、食農教育の場においても重要なモチーフである。食農教育の代表が、小学生とその保護者を対象とした「親子農業体験スクール“あおみっ子”」(以降、あおみっ子)だ。かつては子どもだけを対象としていたが、JAの役割や地産地消の大切さを親世代にしっかり届けたいというねらいから、親子で参加してもらう形に変更した。実施期間は1期3回(6月～12月)で、募集対象は管内在住の小学生と保護者である。募集数は1期15組で、参加費は、1回あたり大人が1,000円、子ども600円(回により変更となる場合あり)となっている。



サツマイモの収穫体験

令和7年度は「農と食について楽しく学び“碧海そだち”について知ろう！」を活動のテーマに設定した。6月の第1回目は、サツマイモ苗の定植と大豆の播種・バケツ稲づくりを、10月の第2回目は、サツマイモと枝豆の収穫体験・米の食べ比べ・バケツ稲の稲刈りを、12月の最終回は、課外学習として碧南営農センターで「へきなん美人」(ニンジン)の集出荷場の見学・碧南市のおいパークで新鮮野菜のもぎとり体験を、それぞれ実施した。

各回に共通して、作業前や合間には、各部門担当者が分かりやすい資料を用いて、それぞれの作目の特徴や、作業方法を丹念に説明する。また昼食は、参加家族が自分たちで作るスタイルとなっている。第1回では、地元産のご飯に、同JAの女性大学「ときいろカレッジ」が碧海そだちを使用して商品開発した「まぜごはんの素」を入れ、親と子が一緒になっておむすびを握った。すべての家族が用意できたところで一斉に食事タイムとなる。食前と食後には、全員で「いただきます」「ごちそうさまでした」と唱和することも必須としている。

各回の最後には、体験で感じたことや、思ったことを、日誌に書いてもらっている。子どもたちからは「体験したことで、農家の苦労やがんばりを知り、そのおかげで野菜や果物が食べられるのだと分かった」「エダマメに虫がたくさんついていて思っていたより大変だった。でも自分たちで植えたエダマメを収穫して食べたので達成感があった」「農家の仕事に興味を持ったので、家の畑でもやってみたい」といった嬉しい感想が寄せられている。

子どもたちが日誌を書いている時間は、JAの担当者が、保護者を対象に、農業やJAの役割と現状を伝えるかっこうの機会だ。これが実は貴重な時間となつており、令和の米騒動が起きた今年度は、なぜ米価格が高騰したのか、そのよう

ななかのJAとしての立場や、どのような思いで活動に取り組んでいるのかを、しっかりと親たちに説明した。こうしたことの積み重ねにより誤解や不安が解消され、保護者たちがJAや農業に一步も二歩も近づくきっかけになった。

あおみっ子の参加者は、継続的に申し込んでくる家族や、口コミから新たに応募した家族など様々だ。いずれにせよ、親子で体験することで、家庭内の日常会話のなかで農業やJAが話題に上るようになったと話す参加者が多いという。また、あおみっ子をきっかけに、保護者が新たに准組合員になるケースも出てきている。



座学が、保護者の地域農業・JA理解を育む場ともなる

5. 継続した食農教育を実現する“あおみっ子”サポーター制度

前編で触れたように、小学校を卒業すると食農教育の機会が激減し、それまで積み重ねた学びが途絶えてしまうことが全国的な課題となっている。それを払拭するのが、「“あおみっ子”サポーター制度」(以降、サポーター)である。これは、あおみっ子で学んだことを単なる思い出に終わらせずに、あおみっ子の卒業後も、引き続き農業体験を通じて、農業や食の大切さを学ぶ機会を設けるとともに、後輩に教えたり仲間意識の醸成を図ったりすることを目的に、令和3年度に導入されたものである。



“あおみっ子”的卒業生である“あおみっ子”サポーターが、ボランティアスタッフとして活躍

対象は、中学生から大学生のあおみっ子の卒業生で、1年ごとに更新する登録制となっている。サポーターは、毎回(出席可能な回だけでもよい)のあおみっ子において、参加者の誘導や圃場の準備、作業の補助、会場の後片付けなど、まさにスタッフの一員として活動する。完全なボランティアであり、日当や交通費

表1 “あおみっ子”サポーターの人数と内訳

	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
全体(人)	15	10	8	12	7
男性	5	4	3	3	3
女性	10	6	5	9	4

の支給はないが、毎年7～15人の卒業生が、自主的にサポーターに手を挙げてくれる（前ページ表1）。

年齢的に一番多いのは、あおみっ子を卒業して間もない中学生であるが、昨年度までは大学生のサポーターもいたそうだ。また、サポーターのなかには、あおみっ子とサポーターの経験から農業に興味を持ち、地元の農林高校に進学した子どももいる。

令和4年度にサポーターを務めた山口優音さんは「小学4年生から6年生に“あおみっ子”として参加していた時と違い、サポーターとして周りに気を配るようになりました。ここでいろいろな体験をして、もっと農業に興味を持ちました。将来の夢はトマト狩り農園と歌手の両立です」という頼もしい感想を寄せている。

最近の傾向として、サポーターはリピート率が高くなっている。サポーターへの参加をきっかけに、サポーター同士やJA職員と顔見知りとなり、仲間意識が芽生えているためだ。こうした濃密な関係性のなかから、将来JAを職場に選ぶ人も出てくることをJAは期待しており、作業の合間などには積極的な声掛けをしているそうだ。

6. 全世代にアクセスできる窓口としての「食農教育」

同JAでは、このほかにも、各支店が企画する農業体験や男性限定の料理教室、女性を中心とした味噌づくり活動、定年者・老後の本格就農を目指すいちじくスクール、産直就農塾など、年齢や性別、目的などに応じて、参加者が自由に選択できる、数多くの活動を展開している（次ページ表2）。

同JAにおいて、食農教育活動全般を統括する組織生活部の川路伸之部長は、「すべてのセグメント（年齢・性別・興味などの集団）に対して窓口を開いていることが、地域に根を張るJAには求められると思います。地域の人々一人ひとりが、なんらかの形でJAと関わり、地域農業やJAの理解者・ファンになってもらえるための入り口が必要であり、その入り口として食農教育は分かりやすく訴求できる活動だと思います」と、全世代型の食農教育の意義を分析する。

「活動に対する成果を図ることは難しいですが、昨年度、JA愛知中央会を通して実施した調査では、活動に参加すると事業利用が増えるというデータが出ています。この地域には移住者も多く、こうした人々に地域のことを知ってもらうためにも、JAや地元農産物の認知度を高める必要があります。そのためには、碧海そだちというシンボルを活用しながら、それをモチーフとした食農教育の展開が有効であり、今後集中して取り組むべき活動だと思っています」（川路部長）。

表2 令和7年度「食農教育」実施要領より、世代別の各部署取り組み予定

世代	取り組み内容	部署
幼稚園・保育園・ こども園 ～小学校	へきなん美人もぎとり しめ縄づくり さつまいも収穫 袋大根栽培 稻作(田植え・稻刈り) マコモダケ 大豆(枝豆) 豆腐づくり等	営農部 営農企画部
	親子食農体験スクール “あおみっ子”	組織生活部 支店
	バケツ稻づくり	営農企画部
中学生～大学生	“あおみっ子” (ソポーター)	組織生活部
社会人	料理教室	支店、営農部 組織生活部
子育て期	親子食農体験スクール “あおみっ子”	組織生活部
	田んぼアート	営農企画部
	各種親子農業体験	支店、営農部 営農企画部
子育て後	味噌づくり	支店
	簡単味噌づくり	支店
	料理教室	支店、営農部 組織生活部
定年・老後	いちじくスクール	営農部
	産直就農塾	産直振興部

7. おわりに～2つの実践から見える全世代型食農教育の意義

以上2回にわたって、全世代型食農教育の現状と意義について考えてきた。2つのJAの実践からは、全世代型食農教育が、地域の人々と、JAや農業をつなぐ「入り口」になり得ている事実が浮かび上がったのではないだろうか。

JAうつのみやでは、単なる体験にとどまらず、学びを重視した大人限定のアグリスクールを新設していた。同JAでは、まずは地域農業のことを知ってもらい、そこにJAがどう関わっているのか、興味・関心を抱いてもらうきっかけとして、明確に大人向けアグリスクールを位置付けていた。その結果、従来の子どもを対象としたアグリスクールや、趣味寄りの女性大学では見られなかった、農業への理解や国消国産への意識の高まりという成果が、大人向けアグリスクールの参加者に現れていた。

一方、JAあいち中央では、碧海そだちというシンボルのもと、多面的な食農教育が展開されていた。あおみっ子では、碧海そだちをきっかけに対象者を子ど

もだけでなく保護者へと広げており、親子がそろって農業体験できるだけでなく、親世代にJAや農業の現状をしっかり伝える機会を創出していた。このことにより、JAや地域農業への理解醸成が進み、新たな准組合員加入にもつながっていた。また、“あおみっ子”サポーター制度を導入することで、小学生で途切れがちな食農教育を、その後も継続して体験できる体制を整えていた。サポーターとなった若者たちは農業への新たな興味を持つに至り、JAの一員としての仲間意識も高めていた。

令和6年10月の「第30回JA全国大会決議」において、「2. くらし・地域活性化戦略」のなかの「協同活動における最も重要な取り組み」として、「全世代型食農教育」が掲げられていることは先に述べた。2つのJAの実践から、全世代型食農教育に取り組むことの重要性が明確になったのではないか。全国のJAにおいて、すべての地域住民の窓口となるような、継続した食農教育の実践が求められる。

(2025年11月取材)